



# 洲宮神社

## 祭神

天比理乃咩命  
(あまのひりのめのみこと)

館山市洲宮字茶畑九二  
宮司・朝倉良次

安房神社祭神の後神で、元の名は「洲ノ神(すさきのかみ)」。  
例祭 八月十一日、九月十四日(鶴谷八幡宮に出祭)



洲宮神社



洲宮神社の祭神「后神天比理乃咩命」と書かれた額の。書いたのは当時の内務省内務大書記官の桜井能監。関東大震災の時に半分破損した。

## 由緒

安房開拓神話にまつわる神社で、安房神社の祭神天太玉命の後神天比理乃咩命を祀っています。平安時代にまとめられた「延喜式神名帳」に記載された格式高い式内大社。「式内大社」については、当社と同神である西岬の洲崎神社との間で長らく論争となっています。また、祭神が西岬の洲崎神社と同神であることから洲崎神社が拜所、当社が奥宮である二殿一社であるとも言われています。

もとは県道をはさんで反対側の魚尾(トオ)山に鎮座していましたが、文永十年(一二七三年)の火災で焼失したため、現在地に移転したと言われています。  
社領は里見氏の時代に洲宮村に三石、洲崎村に4石を寄進され、江戸時代も幕府から洲宮村で七石を寄進されました。

境内出土の祭祀用土製模造品と洲宮神社縁起、南北朝時代の木造天部立像が市の文化財に指定されているほか、毎年一月一日に農耕神事として行われる御田植神事も市の無形文化財に指定されています。

## 自慢の祭

洲宮の神輿が出祭するのは、八月の洲宮神社例祭と九月に行われる安房地域最大の祭礼「やわたんまち」です。

「やわたんまち」初日の出発は午前八時ごろ。安房神社の神輿を追い越してはならない習わしのため、神社前を通り過ぎるのを待ってから渡御します。その昔は、鶴谷八幡神社まで全て担いで行きましたが、現在は館山病院周辺までトラックで運び、そこから市内各所を回って鶴谷八幡神社へ入ると、いよいよ洲宮の鶴谷八幡神社入祭です。二の鳥居から本殿まで一気に走り抜ける姿は観客を大いに盛り上げます。

境内でもみさしを繰り返したのち、御仮屋に神輿を鎮座させ、その後は決められた御旅所である山崎勝平さん宅で休憩します。区の役員たちは宿泊し、「宮番」と呼ばれる神輿の見張りを行います。かつては「八手(やて)」と呼ばれる八人が神輿の管理や道中の休憩所の世話、そして宮番時の炊事などを全て担当していました。現在は役員自ら分担しています。

二日目はすべての神事が終わった後、午後五時に安房神社の還御が始まり、二番目に洲宮神社が還御します。一晩休んだ担ぎ手は力を取り戻し、境内でのみさしは祭り全体のクライマックスを導きます。その際、安房神社の担ぎ手数名が残りの洲宮神社を手助けするという慣習が今も残っています。洲宮神社の祭神と安房神社の祭神が夫婦であるということでのような場面が見られるのも「やわたんまち」の醍醐味です。



安房国司祭で鶴谷八幡宮に入祭する洲宮神社



八月に行われる洲宮神社例大祭では、神社を出発した神輿は、その昔の神社跡地と言われる「明神山」という小高い山に登って、浜降神事(お浜入り)を行います。「浜降神事だけは必ず行わなければならない」と古くから伝えられてきた大切な神事です。



明神山で行われる「浜降神事」



元旦に執り行われる「御田植え神事」

「月もよし 日もよし 神の御田うない申す」と作男が三回唱える。子どもたちが竹製の鍬でうなう所作をするなど、千葉県内でも有数の神事です。  
伝統と仕来りに守られた神輿祭や御田植え神事は、洲宮に暮らす人々の心に生きる自慢の祭です。

洲宮神社の伝統的な神事として、昭和四十四年に館山市無形文化財に指定され、毎年一月一日に執り行われる「御田植え神事」があります。氏子の古老を「作男(さうでえ)」と定め、耕作の「牛」として地区内の新婚や既婚の男子を一人決め、拜殿前の広場で餅や粉、苗などを供え、竹製の鍬を置いて、

このパンフレットは、地域の方々からの聞き取りを中心に、さまざまな文献・史料からの情報を加えて編集しています。内容等につきましてご指摘やご意見等ございましたら、ぜひご連絡いただき、ご教示賜りたくお願いいたします。